

国立民族学博物館の収蔵品⑨

キスワ



サウジアラビア政府より寄贈されたキスワ

カイロを首都としたマムルーク朝時代（一二五〇～一五一七年）以後、キスワはエジプトで作られるようになり、この制度はマムルーク朝を倒したオスマン帝国（一二九九～一九二三年）時代になつてもひきつがれた。

キスワは毎年、新しいものととりかえられる。現在はサウジアラビアにある工場で製作されており、黒字の布には金糸でクルアーンの章句が刺繡されている。民博の西アジア展示場には、一九七〇年に開かれた大阪万国博覧会のさいにサウジアラビア政府より寄贈されたキスワがある。古いキスワは小さく切斷され、巡礼に来た人びとにくばらされることになつてゐるため、民博に展示してあるような大きなキスワはたいそうめずらしく、貴重な資料となつてゐる。

（西尾哲夫）

世界中のムスリム（イスラム教徒）にとって、サウジアラビアにあるメッカへの巡礼は生涯の願いでもあり、大切なつとめでもある。メッカにあるカアバ聖殿はイスラーム（イスラム教）にとって最高の聖地とされ、クルアーン（コーラン）には、カアバについて複数回の言及がある。

カアバの歴史についてはいくつかの解釈があるが、その中には人類の祖先アーダム（旧約聖書のアダム）とその妻ハウワー（イブ）が礎を築いたがノアの大洪水によって失われ、その後、イブラーヒーム（アブラハム）とその息子イスマーイール（イシュマエル）が再建したというものがある。アラブの伝統的な考え方によると、アラブ人の祖先となつたのがこのイスマーイールだった。

旧約聖書が伝える有名な話に、高齢のアブラハムが息子のイサクを神にささげるというものがある。イサクは妻サラとのあいだにできた子であり、エジプト人奴隸ハガルとのあいだにできた子がイシュマエルだ。

カアバ聖殿にはキスワとよばれる黒い幕がかけられている。聖殿同様、キスワの変遷もよくわかっていない。キスワとはアラビア語で「覆う」という意味の動詞から派生した名詞だ。カアバ聖殿にはじめて覆いをかけたのは先述のイスマーイールだという伝承もあるが、歴史上の人物として確証があるのは現在のイエメンにあったヒムヤル国の王だつたらしい。イスラームが興るよりも二〇〇年以上前のできごとだ。預言者ムハンマドは、生涯最後のメッカ巡礼のさいに、自らの手でカアバ聖殿にキスワをかけている。これ以後、キスワの歴史は歴代の為政者と深く結びつくようになった。初期のキスワは現在のような黒布ではなく、白や紅白の布、あるいは錦であつたりしたらしい。

カアバ聖殿はイスラーム（イスラム教徒）にとって、サウジアラビアにある工場で製作されており、黒字の布には金糸でクルアーンの章句が刺繡されている。民博の西アジア展示場には、一九七〇年に開かれた大阪万国博覧会のさいにサウジアラビア政府より寄贈されたキスワがある。古いキスワは小さく切斷され、巡礼に来た人びとにくばらされることになつてゐるため、民博に展示してあるような大きなキスワはたいそうめずらしく、貴重な資料となつてゐる。

荒野で水がつくると天から御使いの声が聞こえてハガルをちからづけたという。一方、イスラームの伝承によると、砂漠に逃れたハガルがわが子のために水をさがしていると、大天使があらわれて翼で大地を蹴り、そこに湧き出したのがザムザムの泉だつた。今日、ザムザムの水はメッカ巡礼者のみやげものとなつてゐる。アラビア半島には、ユダヤ教、キリスト教、イスラームが混然となつた土地神話が根づいてゐる。